



図66 上堰潟から見た大沢遺跡



図65 遺跡の位置
5万分1地形図〔弥彦〕

おおよわ
大沢遺跡 西蒲区稲島

大沢遺跡は、新潟砂丘を見下ろす角田山北麓ほくろくの高台にある。遺跡の範囲は東西五〇〇メートル、南北三五〇メートルに及び、海拔三〇〜五〇メートルにわたる高低差がある。遺跡は、三つの沢に挟まれた尾根上に展開し、北尾根高域のA地区、その低域のC地区、南尾根低域のB地区に分けられる。各地区の間には、遺物の空白地帯が存在する。現在はカキ畑と山林になっている。

昭和五十二（一九七七）年に新潟大学考古学研究室がB地区で、平成元（一九八九）年に巻町教育委員会がA地区で、ともに小規模な発掘調査を行った。その結果、縄文時代の集落の跡であることが分かった。集落は縄文時代の前期終末から中期初頭（約五〇〇〇年前）に成立し、縄文時代の後期後半（約三五〇〇年前）に至るまで連続して人々が住み続けているが、遺物の量が急激に増えるのは縄文時代の中期前葉である。この時期は、角田山麓で縄文時代の集落の数が増加して、ピークに達する時期である。大沢遺跡から大量に出土した中期前葉の土器は、角田山麓の縄文社会の繁栄を象徴するものであり、復元され



図67 中期前葉の土器 左上,高さ55センチメートル

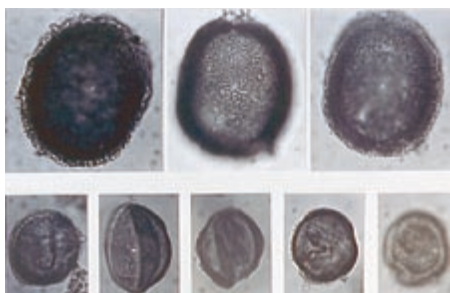


図68 ごみ捨て場から採取された花粉 上段,ユリかヒガンバナ 下段,ヤマノイモ
田英忠氏提供

た一二点(図六七)は市の文化財に指定されている。

また、A地区の発掘調査で見つかったごみ捨て場の跡には、縄文時代中期前葉の花粉や胞子が残されていた。中でも多かったのは三種類の根菜植物で、

地層の深さから、はじめはユリもしくはヒガンバナ、次にゼンマイ、その次にヤマノイモの順で、卓越する植物の種類が変化していたことが分かった。このことは、管理された「菜園」があったことをうかが

わせる。また、ごみ捨て場の最下層からはソバの花粉も見つかった。

ここに暮らした人々は、様々な植物を食料としていた。このような豊富な食料資源が、縄文時代中期の社会の繁栄を支えた基盤となつたのであろう。